有意差が認められなかった。強いて挙げれば、凝集性（2）：集団のまとまりと集団の雰囲気に関して乱数表集計作業に従事した等質集団が3期を通して変化を見せなかったのに対して、同じ作業に従事した異質集団は第1期から第3期へと有意な上昇を示したことがわずかに注目される。

異質集団が時間の経過にそって示した上向きの変化が、生産性に関しては問題解決課題で、集団のまとまりと雰囲気の指標に関しては乱数表の集計作業で見られたということは、生産性を集団の状態と関連づけて解釈することを許さないが、生産性にせよ集団のまとまり・雰囲気にせよ異質集団では低いところからスタートして徐々に高まっていく傾向が共通してみとめられる。

総合的考察と結論

以上2つの実験結果に共通してみられる動向は、創造性検査または問題解決課題に取り組んだ異質集団の成績が、初期に等質集団のそれより低く、時間の経過とともにそれに追いつき、追い越す可能性を示唆している点であろう。このような異質集団の動きは、第1実験で乱数表の集計作業に従事した異質集団にも見られたが、第2実験ではそれが見られなかった。集団成員の数、課題の時系列配置、成績の得点化などの細部に相違があって、厳密な比較はできないが、時間的な推移を診るという観点からすれば、第2実験のデザインの方が優れている。今回の乱数表集計作業のようなよく構造化された課題において始めから実行の役割分担が実験者側から指定されている場合には、成員たちによる自発的調整の余地はきわめて小さなものとなるであろう。潜在的に自己調整の必要度の高い異質集団もそのような状況下では、等質集団との比較で成績に明瞭な差を示し難くなるものと解釈されよう。

白樫（1978）の結果は、おおまかにみれば第2実験で問題解決課題に取り組んだ等質集団と異質集団の第3期以降における関係として位置づけられよう。しかし、細かにみれば実験条件にいくつかの相違がある。まず白樫は等質集団と異質集団を構成するに当たって、被験者をIE得点で外的統制型と内的統制型と中立型に3分し、等質集団は外的統制型だけから成るもの、内的統制型だけから成るもの、中立型だけから成るものの3通りがつくられ、異質集団は内的と中立、中立と外的、内的と外的、さらには内的と中立と外的など2型以上の組み合わせで構成し、しかも型の構成比も雑多であった（いずれも4人集団）。われわれの実験集団のようにIE得点の集団平均を揃えた上で分散を変えるという方法で構成された5人集団ではなかった。また、課題についても、白樫は「E・I社」のみを解かせたのに対し、われわれはこれに加えてさらに別の2問（「10kgの液体」と「バスは待ってくれない」）を解かせているという違いがある。これらの相違がどれだけの影響を与えたかは詳らかにし得ないが、このような問題解決課題の方が、少なくとも役割分担を指定された乱数表集計作業より、成員間調整による体制づくりの余地が大きく、それが異質集団における体制ができるまでの成績不振、体制ができた後の成績の改善として顕現されるものと解されよう。

質問紙から得られた資料は、乱数表の集計作業が他の課題に比べて面白くなかったこと、それが集団の凝集性にいくらか影響を及ぼしていたらしいことを明らかにしたが、等質集団と異質集団との間には直接なんの差異も示さなかった。強いてあげれば、乱数表集計作業に従事した異質集団の雰囲気とまとまりに時間経過にともなう上昇が認められたのに、等質集団では変化が見られなかった点が指摘できよう。成績に両集団間差が見られなかった課題での差異なので、その解釈は容易でないが、異質集団のさまざまな局面に見られる時間的推移と軌を一にするものと捉えておきたい。

いずれにせよ、本実験から得られた知見は、充分な統計的有意水準をもって断定できるものではなかった。異質集団のさまざまな局面おける時間的展開とその生産性に及ぼす効果については、さらなる追求が望まれる。

要　約

Rotterの内的・外的統制型（IE得点）を基準に等質集団と異質集団を構成し、それぞれに2種の課題を与えて成績を比較した。第1実験では予期に反して集団構成（等質か異質か）と課題の種